

古事記傳

卅四

史部
第一
八冊
三函
號

				和書門類
四冊	一三架	一三函	四二五二〇號	

庫	文	閣	內	
二七〇函	四二五二〇	四二五二〇	和書類	
六八架	冊	號		

內閣文庫	
番號	和 42520
冊數	48 (37)
函號	270 16



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



唐書地理志云

新羅國

本居宜長

又昔有新羅國主之子名謂天

之日子是入參渡來也所以

號來者新羅國有一沼名謂

長奴摩字以音此沼之

古事記傳三十四之卷

明宮下卷

本居宣長謹撰

又昔有新羅國主之子名謂天

之日矛是人參渡來也所以參

渡來者新羅國有一沼名謂阿

奴摩。自阿下四此沼之邊一



賤女晝寢於是日耀如虹指其
シヅノメヒルネシタリキコ、ニヒノヒカリ又ジノゴトソノホトラ
陰上亦有一賤夫思異其狀恒
サレタルヲ。マダアルシヅノヲソノサマヲアヤシトオモヒテツネニ
伺其女人之行故是女人自其
ソノヲミナノオコナヒヲウカバヒケリカレコノヲミナソノヒルネ
晝寢時妊身生赤玉爾其所伺
シタリシトキヨリハラミテアカダマヲナモウミケルコ、ニソノウカバヘル
賤夫乞取其玉恒裹著腰此人
シヅノヲソノタマヲコヒトリテツネハツ、ミテコレニツケタリキコノヒト

營田於山谷之間故耕人等之
タニヘニタヲツクレリケレバタヒトドモノ
飲食負一牛而入山谷之中遇
クラヒモノヲウシニオホセテタニノナカニイリケルニソノ
逢其國主之子天之日矛爾問
コニキシシノコ、アメノヒボコアヘリカレソノ
其人曰何汝飲食負牛入山谷
ヒトニトヒケラクナヅイマシクラヒモノヲウシニオホセテタニヘハイルヅ
汝必殺食是牛即捕其人將入
イマシカナラスコノウシヲコロシテクラナラストイヒテスナチソノヒトラトラヘテヒトヤニ

イレムトスレバソノヒトコタヘケラクアレウレヲコサムトニハアラス。タバタビトノ
獄囚其人答曰。吾非殺牛。唯送
田人之食耳。然猶不赦爾。解其
腰之玉幣。其國主之子。故赦其
賤夫。將來其玉置於床邊。即化
美麗孀子。仍婚爲嫡妻。爾其孀

子。常設種種之珍味。恒食其夫
故其國主之子。心奢。詈妻其女
人言。凡吾者。非應爲汝妻之女。
將行吾祖之國。即竊乘小船。逃
遁。渡來留于難波。

此者坐難波
之比賣碁曾

社謂阿加流
比賣神者也

又昔又ハ上ニ此御代ハありし事也云々一件毎
此初ニある又同例ニて是ハ別ニ昔ノ事ヲ云一件
ナリ昔ハ此御代ヨリ前ニありし事ハ何ノ御
代ニ云々ハ傳ノ詳ニ云々故ニ云々昔ニ云々
書紀ニハ此事無仁天皇三年ニ記されし事也其
道向守ハ天日矛ノ玄孫ナリ其向八十餘年ありし
人々其ノ例ヲ合せて思ふに疑ハシ故思ふニ此ハ
同八十八年天日矛之曾孫清彦云々此夏ノ末ハ昔云
云々天日矛ノ渡參來し事ヲ記されし事也昔ハ
ノ三年ノ事ヲ指して云々云々其御代ヨリ

往昔ノ事ヲ聞えし事ハ日矛ノ來し事ハ其御
代ヨリ前ノ夏ナリ其向八十餘年ありし事也其
又津國風土記ニ比賣碁曾社神ノ渡來坐居事ヲ此明
官ノ御世ノ事ニ記せし事也然レハ此ニ記せし事
ハ異國ノ人々彼此ニ多ク此御世ハ參來し事也
其因ある事ハ昔ノ下ニ有字一本ハ其者
作リ其ハ通也昔者二字ありし事也○新羅國
主ハ上ハ傳ニ五十又出此王代始祖ハ姓氏録ニ
新良貴彦波歛武鷗草草不合尊男稻飯命之後也
於新羅國即為國主稻飯命出於新羅國王者祖令
心得がし者ノ誤り出草書似し又祖ノ上ノ者
字ハ之ノ誤令字ハ也の誤り稻飯命者新羅國王之祖

也ナリありて上、
文ナリ相叶ナリり。上卷ニ御毛沼命者ハフミテナミノホラワタリニキ跳波穗渡坐于常世、
國ニあり。此ニを合せて思ふ。御毛沼命新羅國ニ渡、
坐て始メて其王ヲ為坐ナしナり。姓氏録ニ稻飯命ヲあ
はハ御兄弟ノ間ノ傳ノ異ナるナり。此事傳十七ノハ
し。はて朝鮮國ノ三國史記東國通鑑形ニ記セる新
羅國王ノ始祖ヲ云ハナり。此事後ノ王ナる漢然
ふ又其第三世脫解王ヲ云ハ本多婆那國所生也其國
在倭國東北一千里初其國王娶女國王女為妻有娠七
年乃生大卵云々まる始祖三十八年の延々遣瓠
公云々瓠公本倭人初以瓠渡海而來故号焉なる云る
事あるはい々り由ありげなれ也此らハ共々垂
仁天皇ノ御世ニ當まる事あり新羅王ノ姓
傳九の
皇國もて稱するなる漢古語拾遺ハ新羅王子

海檜槍ハ書ニ此字は依らる檜木の矛の謂以て稱す
此義な又書紀神代卷採天香山之金以作日矛○參
渡來ハ麻韋和多理祁理ヲ訓ス祁理ハ辭ノ事也來
而有多理ヲ云々意ノ古言なり万葉十七丁多麻
豆佐能使乃家礼婆也あるハ來而有者云々意あり
是もて心得漢又十五ノ許能安我家流伊毛我許呂
多同格書紀ニ來朝來歸參來參赴詣至投化なるを麻
宇祁理ヲ訓ス是なり但し麻韋ヲ麻宇祁訓
辭ノ祁理ニ來也書亦此ヲ借スる事の外也○所以
參渡來者ハ下文ノ即竊乘小船云々也ある延牙係

きめ。○一沼ヒツノヌメ加は流一字ハ多々ハ讀ム可シじき例なれぬ
毛此ハ讀テ善クむ。和名抄ニ。唐韻云。沼池也。和名奴萬
古本ニハ字鏡ニは淇水ハ名奴ヌ万マン何ナ。奴ヌのノみ毛云
又万葉ニ何ナも奴麻ヌマ也。多クよシ事ナ。○阿具奴摩奴
摩マ也。ハ。此間ノ言ヲ以テ云フもて。阿利那礼河アリナレガ云フ類ナ
素ス次ニ此ハ沼ノ何ナ沼ノ字ヲを舊印本ニ泥ニ也。作ル不レハ誤リ不
本皆ニ共ニ沼ノ也。○一賤女ハ阿流志豆アリシマ能賣ノ訓シ阿
流リハ。或ノ意ナ也。一ヲをヒトリノ也。訓シハ。賤シ者ヲを志シ
豆マ也。云フハ。万葉十八丁十二ノ美布祢左須之津乎能登母
何ナ契冲云。倭文ニ云フ布ハ何ナあラくキくキあリて。賤シ者ヲを
者ノ衣ニ志スるル故ニ。そノ志スるル者ヲを

毛衣ニ也。訓シハ云フ不レ加フ云フ説ハはシるル也。○晝寢ハ比流泥志多理
伎キ也。訓シハ。○虹ハ和名抄ニ。虹ハ和名ニ尔ニ之ニ也。何ナ今
世ニも毛然ク云フ也。天武紀ニ。殿内有大虹ヌビ也。見テ。万葉十
四丁十三ノ伊香保呂能夜左可能イカホロノヤサカノキデニタツ都努ツ自能
也。何ナ也。奴士ヌシ也。訓シハ。是古言ナ不レ修シ。万葉ニなるル也。
云フ陰上ハ上卷ニ。訓シ陰上ハ云フ富登ホト。
も毛然クあればハ何ナ也。○陰上ハ上卷ニ。訓シ陰上ハ云フ富登ホト。
也。何ナ也。○有一賤夫ハ阿流志豆アリシマ能表ノ訓シ。右字ハ。
讀ム也。加フ也。○其狀ハ日光ノ賤女ノ陰上ヲ刺ス。狀ハ。
なリ。此下ニ見テ也。云フ言ヲ加フて心得テ也。○恒ハ其
後恒ハも何ナ也。○行ハ然許那比オコナヒ也。訓シ志和邪シカ又布流フ

又神名帳に豊前国田川郡辛国息長大姫大目命神
社を記す。比咩語曾神社云々。書紀釋云々。豊前国
此神社を比咩語曾神社云々。書紀釋云々。豊前国
風土記曰。田河郡鹿春郷昔者新羅国神自度到來住此
川原便即名曰鹿春神案之豊列比賣語曾社不見神名
帳并風土記也。而任那新羅同種也。辛為比賣語曾神之
無跡。○阿加流比賣神ハ比賣碁曾社の神号なり。比賣
碁曾云ハ社名義かの王に依りて。書紀神代卷に羽明
号あり。玉天明王櫛明王なり云神名あり。皆玉に依りて名あ
り。さて下照比賣也申以心司意りて王の光照る由り。
又二共玉に依りてハ非で彼嬢子の容貌を美て称
す。号り何きりて。神名帳に攝津國住
吉郡赤留比賣命神社あり。此ハ比賣碁曾社の神を又

別又此も祭りたる。然る例あり。出雲國に攝
申次ハ意宇郡熊野大神の御号なる。同書紀垂仁卷
郡又別久志美氣濃神社あり。同書紀垂仁卷
云一云御向城天皇之世額有角人乗一船泊于越國等
飯浦向之曰何國人也。對曰意富加羅國王之子名都怒
我阿羅斯等云々。一云初都怒我阿羅斯等在國之時黃
牛負田器將往田舎黄牛忽失則尋迹覓之跡留一郡家
中時有一老夫曰汝所求牛者入於此郡家中。然郡公等
曰由牛所負物而推之必設殺食若其主覓至則以物償
耳即殺食也。若向牛直欲得何物莫望財物便欲得郡内
祭神云尔俄而郡公等到之曰牛直欲得何物對如老父

之教其所祭神是白石也。以白石投牛，主因以將來置于
 寢中。其神石化美麗童女。於是阿羅斯等大歡之。欲合然
 阿羅斯等去他處之間。童女忽失也。阿羅斯等大驚之間。
 其婦曰：童女何處去矣？對曰：向東方。則尋追來，遂遠浮海。
 以入日本國。所求童女者，詣于難波。為比賣語曾社神。且
 至豐國國前郡。復為比賣語曾社神。並二處見祭焉。此
 傳之異名。國前郡ハ豊後也。此ハ加の豊
 誤り。物又見え。豊後ハ此神
 於是天之日。牙聞其妻遁。乃追

渡來。將到難波之間。其渡之神
 塞以不入。故更還泊多遲摩國。
 即留其國。而娶多遲摩之俣尾
 之女。名前津見。生子多遲摩母
 呂須玖。此之子多遲摩斐泥。此

之子多遲摩比那良岐此之子
ガ コ タ ゲ ニ ヒ ナ ラ キ ヌ レ ガ コ
 多遲麻毛理次多遲摩比多訶
タ ゲ モ リ ツギニ タ ゲ ヒ タ カ
 次清日子三此清日子娶當摩
ツギニキヨ ヒ ユ タ キニ
 之咩斐生子醉鹿之諸男次妹
ノ メヒニアヒテウメル コ スガノモロラ ツギニイモ
 菅竈上由良度美此四字故上
スガカニ ユ ラ ド ミ カレカミニ

云多遲摩比多訶娶其姪由良
イヘル タ ガ 一 ヒ タ カ ソノメ ヒ ユ ラ
 度美生子葛城之高額比賣命
ドミニアヒテウメル コ カヅラキ ノ タカヌカヒ メノミコト
 此者息長帶比
コ ハ オキナガ タラシヒ
 賣命之御祖
メノミコト オヤノ
オヒワタリキ シタ タツキモトメラ
追渡来ハ慕ひて尋求来るなりそまぐ天之日矛の参
来ぬるこや書紀よりく来帰ゆのみ記されて其所
由ハ見込伝ハ傳ハ日本國有聖皇而歸化ゆあり
て比賣甚曾神の来坐ると追来ぬるゆハ見込彼神

地名あるはし。和名抄に、但馬国三方、此字の下に上声
附するは、此名に菅之の讀に直に須賀加麻の唱る
名な故に、竈を若去声に讀まむるを恐ひて、須賀
也、故に讀むるは、去声の非に唯に竈云々の
去声となるあり。是より菅之の讀し之をよき
如く上声に讀むるあり。是より菅之の讀し之をよき
きん、竈の音より上声あり。これ菅之竈の
別あるが故に、次が、あや引連、菅之讀て、竈由良之讀
信き由なり。此の意ハ菅之由良の本ハ地名に因き
は名に、此地名但馬国にありや、尋ね、和名抄に、
良郷、知夫郡、式由、度美、女名に多き度賣
良比女神社もありて名高し。

斗辨なぐく通ひて同きり。又南方乃美布忍富大科度
美ぶの皆男神の名にて、富の意は、此を
其り、さて母の咩斐若當摩れ人なり。此兄妹も共
倭國小生立、此事次は、但馬の地名の須賀を以
て呼ぶるは、但馬にて生立るとるは、父の本
國なり。然呼ばる由あり。○上云ハ、云、字諸本
延佳、今ハ、真福寺本、伊邪河宮段、上所謂云、日代宮
段、小故上云云、なやある例あり。○姪ハ、和名抄に、釋
名云、兄弟之女為姪、尔雅云、所謂昆弟之子為姪、是也一
云、弟之女為姪、和名、米比。○葛城之高額比賣、命ハ伊邪

故其天之日矛持渡來物者玉

河宮段不出て其天皇の御玄孫なる息長宿禰王の御妻ふり。此比賣若父の國但馬にて生坐ふり。此の地名を御名に負賜ふ。後二倭小移り住坐るなる倭し其其彼段に云ふが如し。若又父の比多訶も清日子也共倭又行通ひて此比賣ハ倭にて生坐るゆゑある倭し母の由良度美ハ倭に在りむらゆあがしき由ハ上云るが如し。又息長宿禰王の子大半坂王ハ多遲摩國造之祖也伊邪河宮段不見え。是も但馬國又由縁所るるや。て彼延云ふが如し。傳北二の。○息長帶比賣命之御祖此事も伊邪河宮段に見ゆ御祖ハ御

母を申に其例の事上卷云り。傳十の

カレソノアメノヒボコノモチワタリキツルモノハ。タニ

津寶云而珠二貫又振浪比禮

比禮二字以切浪比禮振風比

音下效此

禮切風比禮又奥津鏡邊津鏡

并八種也。此者伊豆志之

持渡來ハ新羅國よめなり。○玉津寶也ハ貴く美き宝也云々。八種を總て云ふなり。凡て多麻也ハ

珠の類

何物も可れ貴く美き物を賛云言ふは萬の物も
多麻某也云々其物の多かるも其物を称美する稱あり
さし玉を書ハ借字ありして此も然あり初此珠二貫
と就て云小もあはる又珠二貫のみ云云もあはる
かくて珠玉を云ハ世も貴く美き物なるの故も分て
負る名あり然は珠玉の名を本也して其を萬の物
の形の圓もて玉と似たる由なり也云ハ
謂ふは必圓ありぬ物あり多く云をや
○珠二貫ハ
珠の数ハ多きを緒と貫とる二なり二連也云むか如
し○又也云ハ八種の内ふて類を分る言なり次
ふも然なり○振浪比礼振浪ハ那美布流也訓は浪
波振也云意あり故振字を上ハ置はなり凡て某を
なめ花を見る月を待を花見る月待也云次なる切振
り如し珠も此ハ物の名ありさるなり

なめ花を見る月を待を花見る月待也云次なる切振
り如し珠も此ハ物の名ありさるなり
毛此も准ふ修しはて浪を振也ハ浪を起は字云其は
了也万葉二下ハ夕羽振浪社来縁六下朝羽振
浪之声躁十一下風緒痛甚振浪能十四下奈
美乃保能伊多夫良思毛与十七下宇知久知夫利
乃之良奈美乃安里蘇尔与須流相模國風土記も鎌倉
郡見越崎每有速浪崩石國人名号伊曾布利謂振石也
万葉十四下かまられみ土衣日記もいそありはよ
はる磯もハ年月をいれやもやぬ雪のそそるは
也あるみな浪の起を振也云也さて此らハ皆浪の自

起於を云流を浪を振る云ハ。令起を云なれを自然
 流令然る冬の差所れ也。此言ハ通はして共ニ布
 流云云。他も其某を振ふ云云。此比礼の云ハ上卷
 蛇比礼也。下傳十の云云。考合は流し此ハ浪
 を起比礼もて是を振るハ忽ハ浪の發り起於あり。
 ○切浪比礼ハ切ハ絶もて浪を絶止むる比礼なり。但
 切云流ハ浪の中を切分る意もあはる。然らる
 止むる也ハ異あり鳥の羽の聊なぐも切分は意あり。
 ○振風比礼ハ風を起比礼なり。風の吹をも振云。
 万葉二十ハ朝羽振風杜依米也。凡て古ハ布久
 布流也。通ハ云る云多し。上ハされハ常ハ風の

吹云も振云云又同じ。さて令振るをも同く布流也
 云云。振浪の例の如し。○切風比礼ハ風を止むる比
 礼なり。但し此も切分る和名抄ハ聊和名加佐木里さ
 て此四種の比礼を用る法ハ各此を出して振るハ忽
 又浪又風れ起り止もゆるなり。かの海神の火遠
 理命ハ授奉し塩盈珠塩乾珠也。同じ。ろばりなり。
 ○奥津鏡邊津鏡ハ如何ある由を以てかく名けし
 小の未思得文師ハ海中より出する宝鏡なるは云
 云まらり。又四種の比礼ハ准りて思ふハ天日矛遠
 八種ハ皆其備りて海を經て来る道なり。故ハ凡て此
 よて此二鏡也。然る故ハ奥邊の名ハ負るもや有む。

なるは、熊神籬ハ考あり、別子注
せり、出石ハ地名を以て呼ぶあり、然依ハ右の神室也
此記の八種ハ数も合、又名毛皆異、志て物も多
同じか、三年の下の一傳なるハ、其文上、数ハ八種
なれ、其小皆此也、異あり、故、考る、此、八種
八種ハ書紀なる也、皆別物ある、法ハ、初、
新羅より持渡来、宝物ハ種、多く有、け、中、此
の八種ハ、ある、中、重、際、殊、なる、物、も、な、り、け、
故、殊、出石、大神、齋祀、其、社、の、御、靈、実、坐、
せ、倭、子、召、て、見、賜、ふ、修、き、限、ハ、あ、り、は、さ、ぬ、バ、加、の
清彦、が、献、了、ハ、此、八種、の、餘、此、宝、物、も、な、り、け、

藏、於、神、府、也、故、ハ、加、の、京、子、召、り、し、宝、物、ハ、皆
出石、大神、の、御、靈、実、ハ、留、あり、て、但、馬、ハ、還、ら、
掃、も、出石、大神、の、御、靈、実、ハ、納、あり、し、一、の、證、ナ、リ、其、物、
石、小、切、ハ、淡、路、嶋、み、し、て、神、祠、ハ、淡、路、ハ、此、神、ハ、物、
御、靈、実、の、屬、ハ、非、り、津、名、都、志、ハ、淡、路、ハ、此、神、ハ、物、
見、え、出石、の、由、也、津、名、都、志、ハ、淡、路、ハ、此、神、ハ、物、
は、若、出石、の、由、也、津、名、都、志、ハ、淡、路、ハ、此、神、ハ、物、
室、物、也、貢、献、物、也、淡、路、ハ、出石、大神、の、事、ハ、凡、て、見、
一、の、證、ナ、リ、又、書、紀、ハ、出石、大神、の、事、ハ、凡、て、見、
え、加、の、出石、小、切、淡、路、嶋、み、し、て、神、祠、ハ、淡、路、ハ、此、神、
依、ハ、加、の、出石、小、切、淡、路、嶋、み、し、て、神、祠、ハ、淡、路、ハ、此、神、
其、由、記、ナ、リ、淡、路、嶋、み、し、て、神、祠、ハ、淡、路、ハ、此、神、
御、靈、実、ハ、非、り、津、名、都、志、ハ、淡、路、ハ、此、神、
加、の、出石、大神、の、御、靈、実、ハ、留、あり、て、但、馬、ハ、還、ら、
よ、り、其、數、を、具、り、て、加、の、貢、献、室、の、數、も、八、種、也、依、て、其、
て、其、數、を、具、り、て、加、の、貢、献、室、の、數、も、八、種、也、依、て、其、
伊豆、志、之、八、前、大神、出石、ハ、和、名、抄、ハ、但、馬、國、出石、伊豆、
志、

郡出石郷々ある是なり名義ハ此地の山より異き石
此出る也云ハ其由あり其山ハ石山也云て高さ
ありて石ハ其洞の奥よりそ出る其石の異きところハ
形ありて大長短厚薄さかハ石匠の作れなしく
如て圓なるハ一もあしら色ハ薄紫色也て肌
やりあり此石常々其阿らり此里くありあけく取
用るる也数々昔より今に至るまで取らるる也
ふりて其数かきり今に至るまで取らるる也
は此石より起る名也ぞ聞えたる然るを書紀に見
むる出石刀子出石槍より出る地名也云ハ本末
さかすありかの刀子なりの名ハ此地名よりなるもの
なるをやはて和名抄又備前国御野郡小毛出石郷書
紀一傳よ出嶋也此處又由縁ありて負る名もや
神名帳小但馬國出石郡伊豆志坐神社八座神並名是な

了續後紀十五又美和十二年七月但馬國出石郡无位
出石神奉授從五位下依國司等解狀也三代実録十五
小貞觀十年十二月授但馬國從五位上出石神正五位
下廿五又同十六年三月授但馬國正五位下出石神正
五位上日本紀畧又貞元元年二月廿五日諸卿定申但
一靈社也鳥雀蚊虻此處又由縁ありて負る名もや
不入云仍有占卜此處又由縁ありて負る名もや
云此御世新羅王子海檜槍來歸今在但馬國出石郡為
大社也此大社ハ八種の宝物を祠する
其八式又同郡御出石神社名神大也此大社ハ八種の宝物を祠する
又或説又此大社を彦火く出見尊を祭る也云也心得

爾其兄曰若汝有得此孃子者。

避上下衣服量身高而釀甕酒。

亦山河之物悉備設為宇禮豆。

致云爾。自字至致以爾其弟如。

兄言具白其母即其母取布遲。

葛而。布遲。一宿之間織縫衣。

禪及襪香亦作弓矢令服其衣。

禪等令取其弓矢遣其孃子之。

家者其衣服及弓矢悉成藤花。

於是其春山之霞壯夫以其弓。

ヤラヲトメノカハヤニカケタルヲ
イ
ヅ
レ
ヲ
ト

矢。擊。系。孃。子。之。廁。爾。伊。豆。志。袁。登。

メ。ソノハナヲアヤレトオモヒテ。モ。チ。タ。ル。トキニ。ソノヲトメノ

賣。思。異。其。花。將。來。之。時。立。其。孃。

シリニタチテソノヤニイリテ。スナチ。ハ。ヒ。ツ。カ。レ。コ。ヒ。ト。リ。ウ。ミ。タ。リ

子。之。後。入。其。屋。即。婚。故。生。一。子。

キ。コ。ニ。ソ。ノ。ア。ニ。ハ。イ。ヅ。シ。ヲ。ト。メ。ヲ

也。爾。白。其。兄。曰。吾。者。得。伊。豆。志。

エ。タ。リ。ト。イ。フ。コ。ニ。ソ。ノ。ア。ニ。イ。オ。ト。ノ。エ。ツ。ル。コ。ト。ヲ。ウ。レ。タ。ミ

袁。登。賣。於。是。其。兄。慷。愾。弟。之。婚。

テ。カ。ノ。ウ。レ。ヅ。ク。ノ。モ。ノ。ヲ。ツ。グ。ノ。ハ。ズ。カ。レ。ソ。ノ

以。不。償。其。宇。禮。豆。致。之。物。爾。愁。

ハ。ニ。ウ。レ。ヒ。ラ。ス。ト。キ。ニ。ミ。オ。ヤ。ノ。イ。ヘ。ラ。ク。ワ。ガ。ミ。ヨ

白。其。母。之。時。御。祖。答。曰。我。御。世。

ハ。コ。ト。ヨ。ク。ゴ。ソ。カ。ミ。ナ。ラ。ハ。メ。マ。タ。ウ

之。事。能。許。曾。神。習。又。宇。

ツ。シ。キ。ア。ラ。ヒ。ト。ク。サ。ナ。ラ。ヘ。ヤ。ソ。ノ。モ。ノ。ツ。ク。ノ。ハ。ヌ。ト。イ。ヒ。テ

都。志。岐。青。人。草。習。乎。不。償。其。物。

ソ。ノ。ア。ニ。ナ。ル。コ。ヲ。ウ。ラ。ミ。テ。ス。ナ。チ。ソ。ノ。イ。ヅ。レ。ガ。ハ。ノ

恨。其。兄。子。乃。取。其。伊。豆。志。河。之。

カハシマノヨダケヲトリテヤツメノアラコヲツクリ
河嶋之節竹而作八目之荒籠
ソノカハノイシヲトリシホニアヘテソノタケノハニツミ
取其河石合鹽而裹其竹葉令
詛言如此竹葉青如此竹葉萎
而青萎又如此鹽之盈乾而盈
乾又如此石之沈而沈臥如此

トコヒテカマドノウヘニオカシメキコヲモテソノアニヤトセ
令詛置於烟上是以其兄八年
ノアヒダカワキレボミヤミコヤレキカレソノアニウレヒナキテソノ
之間干萎病枯故其兄患泣請
ミオヤニコヘバスチチソノトコヒドヲカヘサシメキコハニ
其御祖者即令返其詛戸於是
ソノミモトノゴトクニタヒラギ
其身如本以安平也
此者神宇
禮豆致之
言本者也

茲神也。上の伊豆志大神を指して云り。伊豆志大神の
註よハ非交本文なる例あり。其由ハ上云り。依て其
女也。ハ此伊豆志大社の神の御霊也。假小現男也。化て
婦人よ娶て生賜する女子なり。かく此事をなすは例
の疑ふべし。上代もハ然る例往くありし事あり。か
白檮原宮段も美和大物主神の現男也。化て勢夜陀多
良比賣小娶て。伊須氣余理比賣命を生給ひし類あり。
以て彼延よ云り考合はるし。傳二十のハ葉。○伊豆志表登賣
神名ハ地名よあり。依て此名よ神也云ひ。師ハ神の
上よ字の
身しう也。然よハ非交。此段の故事凡て神代免きしる

は。いやく上代の事也を聞ゆる。是を以て毛天日矛此
代ありけむ。○八十神也。ハ八十也。多々の神と云
上卷ハ大國主神之兄弟八十神也。あるも同じ。傳十
葉。依て此ハ當時の人なるを神也。しも云るハ。神の御
非交。右の伊豆志表登賣をも神也云る也。同く。甚ハ
上代もて凡て此事のさま神代の如くある。然以て神
也。ハ語傳するなり。○雖欲得こ此嬢子ハ。神の御子
なれど。世よ絶よ。美麗くぞあり。故八十神競ひ
て得む也。せしなる。修し。万葉ニ。吾者毛也。安見見得
有皆人乃得難。尔為云安見見衣多利。○不得婚ハ。延く

受也訓彦し。延く受也云言の次なるを同じふハ上又
由ハ上又云あり。トスエテハ
雖欲得也云次も易得なむ何れを必如此訓彦き語
あり。婚字ハ意を以て。○二神ハ布多理能神也訓彦し。
書るのみなり。○二神ハ布多理能神也訓彦し。
神又布多理能神也云むはいかゞやも聞ゆ先此ハ八十神
きや二柱之也ハ云彦うう何れをなり。此ハ八十神
也云る内ハは外何れも何れも何れも皆不得婚
やあはハ其内ハ非也云云彦けは八十神云は
か少許多の中に一人が得と云むかゝる皆不得
や云可じき非ざれど八十神云る内やむも妨
なし又八十神云るハ得ざる人くや見て其外やせ
むも違ハさて此ハ兄弟あるを然云さふハ次又即兄
云く弟云くや何れも何れも兄弟ハ聞ゆる故
小畧けるも文なり。○秋山之下氷壯夫ハ名義下氷ハ

字ハ借諸木の变紅なる秋山の色を云そハ万葉二
字もて。四十小秋山下部苗妹訓ハ非あり。十五又金山古
日下なるやあるを秋山の紅葉の色あり也。師の云ふこ
は是なり。かくて此言ハ本の意ハ朝備也云こやありて
備ハ夫流也活く言なり。秋山の色の赤葉小丹穂す
故志多夫流也云あり。秋山の色の赤葉小丹穂す
が赤根さ次朝の天の如くある由あり。引朝也あり朱
て朝の天ハはて境原官段又山下影日賣也云人名。書
赤き物なり。はて境原官段又山下影日賣也云人名。書
孝靈卷又真舌媛也。ある名又万葉十五二十小安之比
も山下のやを省けるもや。又万葉十五二十小安之比
奇能山下比可流毛美知葉能六十四小鷺乃来鳴春部
者巖者山下耀錦成花咲乎呼里三十九。客為而物恋

敷尔山下赤乃曾保船奥傍所見之れ此山下毛皆秋

山之下水也同言もて山朝備なるを備を省きて云る

右の内又影也然るは耀く意なりかげが

先也然るは乃云くの哥ハ春よおれ彼ハ錦成

の序もて哥の意もハ抑此ハ春花をよる哥もれ

ば紅葉の序ハかか思ふ人もあるは女良花咲野

序詞ハ哥の意もハかか思ふ人もあるは女良花咲野

又生る白也くじな也ハ如しは右の哥也無

用なりよく味ひて借字あるこ也をさ也るは赤乃

曾保船也然るは赤の枕詞もて意同じ彼ハ夜

麻乃志多也心得来也ハ非なりさてハ奥傍也其地

叶ハかかて右の下部苗妹又山下影日賣なり皆紅

顔を称美て云るなれば此壯夫毛秋山の色の美麗き

此以て称する名あり然るを師の冠辞考も弟の誑

ハ秋山の萎男也云なり志多備ハ志那備なり万葉

下部苗妹也然るは紅出物なる故も轉じて色な

はる也下氷壯夫ハ枯る方お云る

を万葉もてハ色也方お云る

のる也云也云也云也云也云也云也云也云也云也

又、春山ハルヤニ之四名比盛ヒサカエテ而秋山アキヤニ之色名付思吉百磯城シロキモ、シロキノオホ之大オホ宮人ミヤヒト者ハなやある如く、春や秋やの山のまじりきを以て
稱タすタりタゆタりタて和名抄ニ、唐韻ニ云霞赤氣ハ雲也ト和名加須カス
美ミやあり、赤アカ漆ソミの意あり、霞カスミみミるミ天ソラハ朝夕アサユラヒ日ヒのかい
よひヒて赤アカきキもモ此コノなる故ユと云イなるル法ハ、ふフ修シてテハ赤アカく
し霞カスミ字ジをシてテもモ其コノ意イあり、字書ニ又マタ東方ニ赤アカ也トなり
注ツせセ但馬タマ國クニ美含ミカ郡ノ香住カスミノ美ミ加須カスミ郷ノありリ此コノ人ヒト又マタ由ユあり
よヨやヤ○ドモ雖モ乞クハ戀コイひヒなるル此コノ言コト後ノハ許コト此コノ許コト布フ許コト
許コト用ヨウ母ハハなナやヤ活カクくクやヤなナけケれレルル本ホハ乞クやヤ同ドウ言ゴン
比ヒやヤ許コト波ハ許コト比ヒ許コト布フ許コト用ヨウやヤ活カクきキるルやヤ後ノもモ許コト
云イりリ又マタハ母ハハ乞クもモ活カクくクやヤ下シタ卷マキ高津タカツ宮ミヤ段ノ又マタ

天皇テウ以其弟速ハヤ總ソウ別王ベツワウ為シテ媒ナカヒト而乞ク庶妹シヨウイモ女鳥王メドリノワやあるル
二方ニ又マタ聞クゆユ○上下衣服カミシモノハ加美志母カミシモノ能キ伎母キモノ能キ訓ノ法ハ
し鎮御魂イヒド齋戸祭イヒド祝詞イヒド又マタ奉御衣タテマツ波上下備奉ハカミシモノ豆マメやありル
やヤ同ドウじジ上カミやヤハ衣キヌをシ下シタやヤハ袴ハカマをシ云イりリ師シの彼カノ祝詞イヒドの
又マタ伊邪那岐命イサナノミコトの御楔ミウエ又マタ御衣ミウエ御裳ミウエ御禪ミゼンありルされレバ下シタ
ハ表ウラ又マタきキるル服フクハ非ヒ比ヒ彼カノ御楔ミウエ段ノ又マタ云イるル如ニくク下シタ裳ウラのコ
やヤなナハ衣キヌをシ對タテマツてテ云イりリ後ノ修シてテ物モノのカだダやヤをシ種タネくク云イりリ
かカの御楔ミウエのミりリハ御身ミミ小コ著キるル物モノのカだダやヤをシ種タネくク云イりリ
は裳ウラやヤせセむム袴ハカマをシ表ウラ又マタ著キるル下シタの服フクハありル但シしシ上カミ
下シタ衣服キヌやヤ云イりリハ帶オビ下裳シタウラなナやヤをシ其コノ中ナカ又マタこコるルやヤ
ハ云イりリ後ノ修シてテ吉部キチベ秘訓ヒクン又マタ著キるル白シロ兩面リウメン上下シタ可カくク著キるル赤アカ色シキ
上下シタなナやヤ見ミゆユ其他カノの書シヤク等トモもモ或シハ淺黄センワウ上下シタ或シハ赤アカ

色上下なり云るる多し皆上々ハ狩衣直垂素襖な
ゞ何およれ上々暑る服を云下々袴を云上も下
一具なる字某色上下々云り又今世○避ハ避
又上下々云服ある其も下々袴を云り
國々云避めて已り服るるを脱て弟又與可渡さむ
や云なり脱去て裸躰よ那○身高高ハ師の多氣々訓
進しる宜し即高さ々云意あり万葉ふ山々嵩をも高
々書り嵩々云も即高き意の名又竹も長○醸麴酒ハ
美加爾佐氣袁加美々訓造し若然らる此記の文の例
漢文の格を以て云はる醸酒麴々書てサケヲミカニ
カニ々々を訓造るれニカニサケヲ云々醸酒々書
むるやいかば々々云々然ハニ記中字を置る例
必漢文も拘らば又必一例と定まれるるもなげ

もハ必志心字の置はるる泥む修む非ハニカノキヲ訓
又語をよく思ひて訓造るる酒を指てこそ然ハニ酒ハ紀々も
云修け醸酒事をいかにさる云ハ又酒ハ紀々も
訓造しさて酒ハ醸ハ醸ハ常の事なるる殊更ニ醸
おやしも云る所以ハ量身高度云々々々を醸タレカせむ
と免なり其ハ量リテ身高度々々其酒を醸ハ湛タるる
深さを身の高々等々ヒトレなるる酒の量ホドなり故
と醸酒々のみめてハ醸タレカあるる又因て醸ハ醸ハ
云醸ハ酒を醸加米して和名抄ハ本朝式云醸美
加辨色立成云大醸和名同上ニと醸和名毛太非々あ
醸モ毛太非々云名ハ字鏡又醸ハ弥加々々て古書見
古々ハ見え文

し侍ら免。碁の負^{マテ}こ^コをせ^セら^ラゆ^ユ。遊仙窟^{サカウツラウキョク}に賭酒^{ネツラ}ま^マる^ル賭^ト宿^{ヤク}や^ヤあり。契沖^{キエウチウ}豆^{マメ}玖^クハ。都^ツ具^グ能^ノ比^ヒの畧語^{リョクゴ}あり^リ云^ク云^ク然^シ。毛^{モウ}阿^アる^ル法^{ホウ}し。即^{ソレ}下文^{ゲキ}又^{マタ}不償^{ツグハ}其^シ宇^ウ礼^レ豆^{マメ}玖^ク之^ノ物^{モノ}や^ヤあり。償^{ツグ}を^ヲバ^バ常^{ジョウ}小^コ都^ツを^ヲ清^{シヨウ}具^グを^ヲ濁^{ダク}て^テ云^クを^ヲ某^{ナニ}豆^{マメ}久^クや^ヤ云^クや^ヤき^キハ^ハ上^{ウヘ}又^{マタ}言^ク連^{レン}く^ク故^コ又^{マタ}都^ツを^ヲ濁^{ダク}る^ル都^ツを^ヲ濁^{ダク}る^ルか^カら^ラ返^{マゼ}て^テ具^グを^ヲ清^{シヨウ}ハ^ハ上^{ウヘ}の^ノ音^{オン}便^{ベン}よ^ヨて^テさ^サる^ル例^{レイ}あり^リ。何^{ナニ}て^テ今^{イマ}世^セ俗^{ソク}言^{ゴン}又^{マタ}カ^カら^ラ金^{カネ}の^ノ意^イの^ノ轉^{テウ}き^キる^ルな^ナら^ラ。かく^{カク}て^テ此^{コノ}の^ノ宇^ウ礼^レ豆^{マメ}玖^クハ^ハ。此^{コノ}嬢^{ジョウ}子^シを^ヲ弟^{テイ}の^ノ易^{ヤク}得^{トク}て^テむ^ム云^ク依^イを^ヲ慨^{カイ}憤^{フン}み^ミて^テ為^スる^ル豆^{マメ}玖^クよ^ヨて^テ汝^ニ若^シ嬢^{ジョウ}子^シを^ヲ得^{トク}て^テむ^ムよ^ヨハ^ハ上^{ウヘ}件^{ケン}の^ノ如^ニき^キ賭^ト物^{モノ}を^ヲ汝^ニ又^{マタ}與^ユふ^フ法^{ホウ}し^シ若^シ又^{マタ}汝^ニ得^{トク}て^テ又^{マタ}ハ^ハ上^{ウヘ}件^{ケン}の^ノ如^ニき^キ賭^ト物^{モノ}を^ヲ吾^ガ小^コ與^ユふ^フ法^{ホウ}し^シや^ヤなる^ルを^ヲし^シ。○云^ク尔^ニハ^ハ伊^イ布^フや^ヤ訓^{キン}ず^ズし^シ。尔^ニ字^ジハ^ハ讀^ク法^{ホウ}う^ウる^ルに^ニ記^キ中^{チュウ}。○其^シ母^ボハ^ハ弟^{テイ}の

母^ボよ^ヨて^テ兄^{ケイ}ハ^ハ異^イ腹^{フク}や^ヤ聞^クえ^エる^ルなり^リ。○布^フ遲^チ葛^カハ^ハ下^ゲ文^{ブン}ハ^ハ成^{セイ}藤^{トウ}花^カや^ヤある^ル又^{マタ}依^イる^ル小^コ藤^{トウ}の^ノ葛^カなり^リ。葛^カハ^ハ蔓^{マン}よ^ヨて^テ今^{イマ}云^ク都^ツ流^{リウ}乃^ノ豆^{マメ}良^{リョウ}や^ヤ訓^{キン}ず^ズし^シ。此^{コノ}事^ジ上^{ウヘ}ハ^ハ委^イ云^クなり^リ。傳^{デン}六^{ロク}の^ノ禪^{ゼン}ハ^ハ袴^{カウ}あり^リ。記^キ中^{チュウ}袴^{カウ}を^ヲ禪^{ゼン}や^ヤ昏^{コン}なり^リ。○襪^{ワク}沓^{カク}ハ^ハ久^ク都^ツ志^シ多^タ具^グ都^ツや^ヤ訓^{キン}ず^ズし^シ。字^ジの^ノ襪^{ワク}を^ヲ先^{セン}ハ^ハよ^ヨる^ルに^ニ和^ワ名^ナ折^セハ^ハ履^{レイ}唐^{タウ}韻^{イン}云^ク草^{ソウ}曰^{イフ}扉^ヒ麻^マ曰^{イフ}屨^ケハ^ハ穩^{オン}なり^リに^ニ聞^クゆ^ユ。和^ワ名^ナ折^セハ^ハ履^{レイ}唐^{タウ}韻^{イン}云^ク草^{ソウ}曰^{イフ}扉^ヒ麻^マ曰^{イフ}屨^ケ革^{カク}曰^{イフ}履^{レイ}和^ワ名^ナ並^{テイ}久^ク豆^{マメ}用^{ヨウ}鞞^{クワン}字^ジ音^{オン}沓^{カク}。沓^{カク}字^ジハ^ハ久^ク都^ツの^ノ義^ギなり^リ。偏^{ヘン}を^ヲ省^{シヨウ}け^ケる^ルに^ニて^テ。此^{コノ}外^{ガイ}履^{レイ}の^ノ類^{レイ}多^タく^ク見^ミゆ^ユなり^リ。同^{ドウ}書^{ショ}。説^{セツ}文^{ブン}云^ク襪^{ワク}足^{ソク}衣^イ也^ヤ。字^ジ亦^{モト}作^ス鞞^{クワン}和^ワ名^ナ之^シ太^{タイ}久^ク頭^{トウ}や^ヤ見^ミえ^エ字^ジ鏡^{キョウ}又^{マタ}鞞^{クワン}襪^{ワク}也^ヤ。志^シ太^{タイ}久^ク豆^{マメ}見^ミゆ^ユ沓^{カク}の^ノ裏^{ウラ}ハ^ハく^ク沓^{カク}や^ヤ云^ク由^ユの^ノ名^ナなり^リ。後^ゴ世^セの^ノ音^{オン}便^{ベン}あり^リ。さて^テ沓^{カク}襪^{ワク}まで^{マデ}や^ヤ云^クる^ルに^ニて^テ凡^ニ

て身^キ又服^{モノドモ}る物等を此^レ又攝^{コト}する信^{コト}して此^{コト}又此^{キモノ}衣服
此事^{コト}を及^{多ク}襪^{ツツサ}沓^{ツツサ}具^{ツツサ}又云^フるを思^フふ若^シくハ是^レ即^チ弟^ニ若^シ
此^{コト}宇^ツ礼^レ豆^ツ玖^ツ又負^ニしつゝバ兄^ニ小^ツ償^ツハむの設^{コト}りもやらむ
若^シ然^ラらばハ襪^{ツツサ}沓^{ツツサ}具^{ツツサ}を造^ルる事^{コト}まさ水^{ツツサ}此^{コト}ハ必^ズ然^ナ
てハ云^フハて毛^{ツツサ}ある漆^{ツツサ}きこややさ水^{ツツサ}此^{コト}ハ必^ズ然^ナ
らむ也^{ツツサ}も決^{サダ}てハ云^フがし。○衣^{キモノ}禪^{カニ}等^{ツツサ}云^フて上^{ツツサ}の襪^{ツツサ}
沓^{ツツサ}なやをも免^ラすや。等^{ツツサ}ハ後^{ツツサ}又那^ナ杼^{ツツサ}云^フが如^クくもて
ハ何^ニやなるをも音^{ツツサ}便^{ツツサ}又なんや云^フ。正^{ツツサ}しく其^{ツツサ}物^{ツツサ}ハ限^{ツツサ}ら
又其^{ツツサ}人を省^{ツツサ}きてなや云^フあり。正^{ツツサ}しく其^{ツツサ}物^{ツツサ}ハ限^{ツツサ}ら
次^{ツツサ}餘^{ツツサ}もあるこやを云^フ辞^{ツツサ}なり。万^{ツツサ}葉^{ツツサ}五^{ツツサ}八^{ツツサ}丁^{ツツサ}又絶^{ツツサ}綿^{ツツサ}良^{ツツサ}波^{ツツサ}
母^{ツツサ}○令^{ツツサ}取^{ツツサ}ハ執^{ツツサ}持^{ツツサ}しむるあり。○遣^{ツツサ}ハ霞^{ツツサ}壯^{ツツサ}士^{ツツサ}をなや。○
衣服^{キモノ}ハ上^{ツツサ}の衣^{ツツサ}禪^{ツツサ}襪^{ツツサ}沓^{ツツサ}なやを都^{ツツサ}て云^フ。○藤^{ツツサ}花^{ツツサ}ハ和^{ツツサ}名^{ツツサ}抄

又藤^{ツツサ}和^{ツツサ}名^{ツツサ}布^{ツツサ}知^{ツツサ}○成^{ツツサ}ハ化^{ツツサ}なり。○衣^{キモノ}服^{ツツサ}ハ藤^{ツツサ}葛^{ツツサ}以^{ツツサ}て
織^{ツツサ}するなれど藤^{ツツサ}又縁^{ツツサ}あるを弓^{ツツサ}矢^{ツツサ}ハ藤^{ツツサ}小^{ツツサ}縁^{ツツサ}あけしや
毛^{ツツサ}其^{ツツサ}形^{ツツサ}ハ此^{ツツサ}ハ藤^{ツツサ}花^{ツツサ}の志^{ツツサ}をひよしく似^{ツツサ}する縁^{ツツサ}あ
はるや。○春^{ツツサ}山^{ツツサ}之^{ツツサ}霞^{ツツサ}壯^{ツツサ}夫^{ツツサ}上^{ツツサ}ハみふ弟^{ツツサ}やのみ云^フて名
を云^フるこやなき此^{コト}又かく名^{ツツサ}を云^フる故^{ツツサ}ハ上^{ツツサ}ハみな
兄^{ツツサ}小^{ツツサ}對^{ツツサ}子^{ツツサ}て云^フ延^{ツツサ}ある故^{ツツサ}又弟^{ツツサ}や云^フるを此^{コト}ハ然^{ツツサ}らざれ
ばなり。○其^{ツツサ}弓^{ツツサ}矢^{ツツサ}ハ藤^{ツツサ}花^{ツツサ}小^{ツツサ}化^{ツツサ}する弓^{ツツサ}矢^{ツツサ}あり。既^{ツツサ}又藤^{ツツサ}花^{ツツサ}
ふれぞ弓^{ツツサ}矢^{ツツサ}ハ云^フ陰^{ツツサ}かす次^{ツツサ}とて藤^{ツツサ}花^{ツツサ}云^フ陰^{ツツサ}なる
也^{ツツサ}然^{ツツサ}云^フてハ衣服^{ツツサ}も同^{ツツサ}藤^{ツツサ}花^{ツツサ}又化^{ツツサ}するバ差^{ツツサ}別^{ツツサ}なき故^{ツツサ}又
弓^{ツツサ}矢^{ツツサ}の化^{ツツサ}する方^{ツツサ}なるこや。○廁^{ツツサ}ハ上^{ツツサ}又見^{ツツサ}ゆさて廁^{ツツサ}や
を知^{ツツサ}さむし免^{ツツサ}すかく云^フあり。○廁^{ツツサ}ハ上^{ツツサ}又見^{ツツサ}ゆさて廁^{ツツサ}や
の矣^{ツツサ}云^フて此^{コト}廁^{ツツサ}小^{ツツサ}の嬢^{ツツサ}子^{ツツサ}入^{ツツサ}する事^{コト}をバ畧^{ツツサ}きてあめり

然然聞ゆるも文の美きなるなり。○繫糸ハ掛あり。○其花ハ
弓矢の化^ナする藤花なり。上又ハ弓矢也云此ハ花也
云て互^{タガヒ}相照して知る儘く物ある古の文の化^ナ
てし。○思^シ異^イハ藤花の化^ナする時又非ありし。又
也其時ありやも廁中ふありむハ異^イし加^カる。○
將來ハ屋の内子持還るなり。○立其嬢子之後云くか
とてハ弓矢の藤花よある事用ふくいし。○
如く又聞ゆるありやも嬢子の廁よりかする後又立て入
なり。然らば上又其衣服も悉く藤花也成^ナり云ハ
此^コの用なり。其ハ衣袴杳^シなり皆藤花よありし身

ハ其^{ソノ}隱^{カク}し見えど藤花のみなる如く見ゆる
故小嬢子の心又人ありて後又立て来るも知
らでし。○庖^イありし同類の藤花ぞ思ひて再ハ異
なり。○なる修し。されば弓矢の化^ナするも此^コに至^リ
用あるもありし。○如此^{カク}為^シて嬢子の屋内ふ入^ル
也を得し。母の初より此^{カク}ありし。○如此^{カク}ありし。○
よぞありける。○白檮原宮段又大物主神の丹塗矢又化^ナ
の故事やや似^ニし。○傳^ワ白檮原宮段又從^ヒ其^カ八咫鳥之^ヤ
廿の卷又在考合次修し。○後幸行者。○一子ハ古比登理也訓^シ
め其^シ毛。○慊^カ懐^クハ宇礼多美豆也訓^シ。此言ハ上豆礼

物ハ上ニ挙スル上下衣服より山河之物まで此種く
の品なり。○償ハ都具能布也訓字鏡よりハ貸豆久乃布
也有り。いかゞ言の意都具ハ給あるは能布ハ附云
辭より登く能布ハ能の類の能布なり。○愁ハ霞
也附云言ハ多かるも能布也云ハ少し。○愁ハ霞
償字ハ還所値也也。○御祖ハ即母なり母を御祖也云ハ上代
社夫のあり。○御祖ハ即母なり母を御祖也云ハ上代
の例より記中より多し。但し此母ハ上よりハ母也のみ
に就て云也其人に就て云也の差なり。○御祖ハ即母なり母を御祖也云ハ上代
の例より記中より多し。但し此母ハ上よりハ母也のみ
に就て云也其人に就て云也の差なり。○御祖ハ即母なり母を御祖也云ハ上代

有。○我御世之事也ハ我世の間よりある事を云。凡て人
の現しとて在命のちやを世也云也。又此ハ世嗣の世
もて我子之事を加く云るもあり。何れ何れ
可れ自御也云るハ凡人に似たりしかるを此
段ハ凡て神代のみ語傳りたるも此なり。母を御
るも此類。○能許曾。曾字諸本に男也作るハ誤なり。能
なり加し。○能許曾。今ハ真福寺本延佳本に依れり。能
ハ余之云くせよの常云。漢文も能。是あり。許曾
は辞なり。○神習ハ師の如微那良波米也訓りたる宜
し。能神の御所行をこそ效ふは物なり。云意あり。
○宇都志岐音人草ハ上卷より出。廿四葉。○習乎ハ那良

閑夜^{ハヤ}の訓^{ナラフ}を^{ナラフ}し。古言^{ナラフ}の格^{ナラフ}は^{ナラフ}訓^{ナラフ}て^{ナラフ}ハ^{ナラフ}。那良^{ナラフ}閑婆^{ナラフ}尔夜^{ナラフ}云^{ナラフ}意^{ナラフ}なり。○不償^{ナラフ}ハ^{ナラフ}不^{ナラフ}ハ^{ナラフ}奴^{ナラフ}の訓^{ナラフ}を^{ナラフ}し上^{ナラフ}此^{ナラフ}閑夜^{ナラフ}の結^{ナラフ}あり。○受^{ナラフ}訓^{ナラフ}て^{ナラフ}ハ^{ナラフ}。閑夜^{ナラフ}此^{ナラフ}辞^{ナラフ}の例^{ナラフ}万^{ナラフ}葉^{ナラフ}四^{ナラフ}。吾^{ナラフ}念^{ナラフ}乎^{ナラフ}人^{ナラフ}尔^{ナラフ}令^{ナラフ}知^{ナラフ}哉^{ナラフ}玉^{ナラフ}匣^{ナラフ}閑^{ナラフ}阿^{ナラフ}氣^{ナラフ}津^{ナラフ}跡^{ナラフ}夢^{ナラフ}西^{ナラフ}所^{ナラフ}見^{ナラフ}ハ^{ナラフ}非^{ナラフ}あり。○心^{ナラフ}由^{ナラフ}毛^{ナラフ}思^{ナラフ}哉^{ナラフ}妹^{ナラフ}之^{ナラフ}伊^{ナラフ}目^{ナラフ}尔^{ナラフ}之^{ナラフ}所^{ナラフ}見^{ナラフ}。○六^{ナラフ}。妹^{ナラフ}尔^{ナラフ}恋^{ナラフ}哉^{ナラフ}時^{ナラフ}不^{ナラフ}定^{ナラフ}鳴^{ナラフ}。○九^{ナラフ}。常^{ナラフ}之^{ナラフ}陪^{ナラフ}尔^{ナラフ}夏^{ナラフ}冬^{ナラフ}往^{ナラフ}哉^{ナラフ}裘^{ナラフ}扇^{ナラフ}不^{ナラフ}放^{ナラフ}山^{ナラフ}住^{ナラフ}人^{ナラフ}不^{ナラフ}ハ^{ナラフ}奴^{ナラフ}の訓^{ナラフ}を^{ナラフ}し。十二^{ナラフ}。乳^{ナラフ}飲^{ナラフ}哉^{ナラフ}君^{ナラフ}之^{ナラフ}於^{ナラフ}毛^{ナラフ}求^{ナラフ}覽^{ナラフ}乳^{ナラフ}の免^{ナラフ}。○今^{ナラフ}本^{ナラフ}ハ^{ナラフ}多^{ナラフ}く^{ナラフ}訓^{ナラフ}を^{ナラフ}誤^{ナラフ}り。○吾^{ナラフ}世^{ナラフ}の事^{ナラフ}ハ^{ナラフ}何^{ナラフ}事^{ナラフ}も^{ナラフ}能^{ナラフ}神^{ナラフ}の御^{ナラフ}所^{ナラフ}行^{ナラフ}を^{ナラフ}こ^{ナラフ}そ^{ナラフ}效^{ナラフ}ふ^{ナラフ}は^{ナラフ}こ^{ナラフ}。

也^{ナラフ}なれ^{ナラフ}然^{ナラフ}る^{ナラフ}今^{ナラフ}其^{ナラフ}兄^{ナラフ}子^{ナラフ}ハ^{ナラフ}神^{ナラフ}の^{ナラフ}效^{ナラフ}は^{ナラフ}之^{ナラフ}して^{ナラフ}昔^{ナラフ}人^{ナラフ}草^{ナラフ}の^{ナラフ}所^{ナラフ}為^{ナラフ}を^{ナラフ}效^{ナラフ}す^{ナラフ}る^{ナラフ}や^{ナラフ}。償^{ナラフ}ふ^{ナラフ}は^{ナラフ}物^{ナラフ}を^{ナラフ}償^{ナラフ}ふ^{ナラフ}は^{ナラフ}之^{ナラフ}なり。○休^{ナラフ}る^{ナラフ}ハ^{ナラフ}師^{ナラフ}の^{ナラフ}云^{ナラフ}を^{ナラフ}違^{ナラフ}ふ^{ナラフ}。○今^{ナラフ}其^{ナラフ}ハ^{ナラフ}習^{ナラフ}は^{ナラフ}之^{ナラフ}して^{ナラフ}昔^{ナラフ}人^{ナラフ}草^{ナラフ}此^{ナラフ}直^{ナラフ}か^{ナラフ}る^{ナラフ}。○契^{ナラフ}約^{ナラフ}を^{ナラフ}違^{ナラフ}ふ^{ナラフ}は^{ナラフ}之^{ナラフ}なり。○抑^{ナラフ}上^{ナラフ}代^{ナラフ}ハ^{ナラフ}昔^{ナラフ}人^{ナラフ}草^{ナラフ}も^{ナラフ}皆^{ナラフ}直^{ナラフ}か^{ナラフ}る^{ナラフ}。○其^{ナラフ}を^{ナラフ}直^{ナラフ}代^{ナラフ}ハ^{ナラフ}昔^{ナラフ}人^{ナラフ}草^{ナラフ}の^{ナラフ}後^{ナラフ}代^{ナラフ}ハ^{ナラフ}此^{ナラフ}の^{ナラフ}直^{ナラフ}か^{ナラフ}る^{ナラフ}。○兄^{ナラフ}子^{ナラフ}ハ^{ナラフ}阿^{ナラフ}尔^{ナラフ}那^{ナラフ}流^{ナラフ}古^{ナラフ}の^{ナラフ}訓^{ナラフ}を^{ナラフ}し。○此^{ナラフ}事^{ナラフ}上^{ナラフ}傳^{ナラフ}世^{ナラフ}二^{ナラフ}の^{ナラフ}下^{ナラフ}氷^{ナラフ}壯^{ナラフ}夫^{ナラフ}なり。○其^{ナラフ}伊^{ナラフ}豆^{ナラフ}志^{ナラフ}河^{ナラフ}其^{ナラフ}中^{ナラフ}ハ^{ナラフ}其^{ナラフ}地^{ナラフ}麻^{ナラフ}古^{ナラフ}なり。○子^{ナラフ}ハ^{ナラフ}云^{ナラフ}は^{ナラフ}之^{ナラフ}なり。○其^{ナラフ}伊^{ナラフ}豆^{ナラフ}志^{ナラフ}河^{ナラフ}其^{ナラフ}中^{ナラフ}ハ^{ナラフ}其^{ナラフ}地^{ナラフ}麻^{ナラフ}古^{ナラフ}なり。

なるや云むが如し。此川ハ今世も伊豆志川云川
あり。○河嶋ハ河中ハある嶋なり。○之節竹ハ之字諸
本ハ一々作り今ハ真福寺本ハ依り。此ハ何進善け
む得思定免されやも書紀継躰卷哥ハ以矩美娜閑余
囊閑云云云云あるハ依て姑く節竹やある方を取
置られや一節竹も悪しやハ非交して節竹やハ竹
ハ節ある物なる故と云竹を云う。はと竹を杖用ふ
時の名よて節の間を切て用る云云。書紀の哥なる
よ作りやあれを不用ふ時あり。此も籠ハ作るを云云。延な
り河嶋の節竹を取やあるハ本より竹の一種の名此
如くも毛聞ゆおれ取用ひ。又一節竹やあるよ依ら
むやて云延あるを妨なし。

一節の間に用るを云なる信し。契沖が彼書紀の哥
とみ竹ハ四長ハ一節を一と多や云て四節を云
や云云るけり。かハいふ竹のよなきや云るハ非
文よきけや云る即いとも竹のよなきや云るハ非
二云ハ古哥の常なり。又師ハなよ竹の畧かや云
きとれや宜し。和名抄ハ野王按節竹中隔而不可通者也
和名布之。まハ兩節間俗云與や河や。かハまハ與ハ節
竹節の間に用るも古より通ハして其をも節竹書
ハ常なり。○八目之荒籠ハ籠ハ古や訓信し。必加多麻
み古名や思ハハ和名抄ハ籠和名古やあり。万葉十四
かハあちなり。和名抄ハ籠和名古やあり。万葉十四
十八ハ伎波都久乃乎加能久君美良和礼都賣乎故尔
毛乃多奈布西奈等都麻佐祢師云第四句籠もも満無
○古事記傳三十四
○四十三

師ハ多加婆也訓^{ミナカバ}まじりし其も古言^{コト}はて此^{コレ}又^ツ裏みて彼
なれ^{ナレ}此^{コレ}延^{ノビ}ハ然^{シカ}よみてハ^ハららし^シはて此^{コレ}又^ツ裏みて彼
荒籠^{アラカ}又^ツ入^ルるなる^{ナリ}は籠^カ又^ツ入^ルる^ルハ云^ハぞれ^レも籠
を作^ルやある^ル少^クて自^ラ然^ラ聞^ユゆ^スて如此^{カク}為^ルハ^ハ詛^{トコヒモ}物の
設^セなり^ニ○此^{コレ}竹葉^{チクエフ}こ^ノハ多加婆^{ミナカバ}也^{ナリ}訓^シは是^レよ^ク沈^シ臥^セ
也^{ナリ}云^ハまで^ト詛^{トコヒモ}言^ハなり^ニ○青^{アヲ}ハ^ヲ阿^ア衰^ヲ年^ニ也^{ナリ}訓^シは是^レよ^ク沈^シ臥^セ
く^クなる^ルも云^ハ言^ハなり^ニ然^ルる^ルハ竹^{チク}葉^{エフ}ハ^ハも^モ也^{ナリ}青^{アヲ}き^キ物^{モノ}な
る^ルハ^ハ青^{アヲ}む^ムハ^ハ云^ハ言^ハなり^ニ非^レれ^レ也^{ナリ}此^{コレ}ハ^ハも^モ也^{ナリ}青^{アヲ}む^ムハ^ハ云^ハ言^ハなり^ニ對^シ
して^シ姑^コか^カく^クは^ハ云^ハ言^ハなり^ニ又^{マタ}今^{イマ}昔^{キナ}き^キと^ト就^スて^テ云^ハ言^ハなり^ニ阿^ア衰^ヲ年^ニ也^{ナリ}青^{アヲ}米^メ
流^{リウ}也^{ナリ}も^モ訓^シは^ハ也^{ナリ}也^{ナリ}志^シ煩^{マン}年^ニ也^{ナリ}對^シて^テ阿^ア衰^ヲ年^ニ也^{ナリ}云^ハ言^ハなり^ニ
ぞ^ゾ宜^イき^キ次^ジなる^ル塩^{シホ}之^ノ也^{ナリ}也^{ナリ}此^{コレ}の^ノ語^ゴハ^ハ此^{コレ}竹^{チク}葉^{エフ}の^ノ青^{アヲ}む^ムが^ガ碁^ゴ
登^ト也^{ナリ}訓^シは^ハ次^ジなる^ルも^モ此^{コレ}又^ツ效^{ナラ}也^{ナリ}○萎^シハ^ハ志^シ煩^{マン}年^ニ也^{ナリ}訓^シ
は^ハ万^{マン}葉^{エフ}十^{ジュウ}八^{ハチ}三^{サン}十^{ジュウ}二^ニ丁^{テイ}也^{ナリ}字^ジ惠^ヱ之^ノ田^{テン}毛^モ麻^マ吉^キ之^ノ波^ハ多^タ氣^ケ毛^モ安^ア

佐^サ其^キ登^ト尔^ニ之^ノ保^ホ美^ミ可^カ礼^レ由^ユ苦^ク古^コ今^{イマ}集^{シユ}序^{シヨ}也^{ナリ}志^シが^ガ然^ルる^ル花^{ハナ}の
色^{イロ}なく^クて^テ是^レを^ヲ真^{マコト}字^ジ序^{シヨ}と^ト萎^シ花^{ハナ}也^{ナリ}書^カり^リ師^シハ^ハレ^レナ^ナブ^ブ也^{ナリ}
なる^ル志^シが^ガ然^ルる^ル也^{ナリ}云^ハ言^ハなり^ニ今^{イマ}世^セも^モこ^コも^モ云^ハ言^ハなり^ニ古^コく^ク見^ミあ^アる^ル
ら^ラ彼^カが^ガの^ノ下^カ氷^ヒを^ヲ志^シ那^ナ備^ヒ也^{ナリ}解^カる^ルも^モハ^ハ當^マら^ラる^ルも^モ也^{ナリ}
上^ウ又^{マタ}云^ハる^ル○而^{シテ}字^ジ讀^{ドク}は^ハ次^ジなる^ルも^モ同^{ドウ}じ^ジ上^ウ卷^{クワン}大^{ダイ}
山^{サン}津^{ジン}見^ミ神^{カミ}の^ノ字^ジ氣^キ比^ヒ言^ハなり^ニ如^{ゴト}木^キ花^{ハナ}之^ノ榮^エ坐^ザ也^{ナリ}ある^ル也^{ナリ}准^{クニ}
ふ^フ也^{ナリ}○青^{アヲ}萎^シハ^ハ阿^ア衰^ヲ美^ミ志^シ煩^{マン}米^メ也^{ナリ}訓^シは^ハ○如^{ゴト}此^{コレ}塩^{シホ}之^ノ
盈^{エフ}乾^{ケン}ハ^ハ上^ウの^ノ竹^{チク}葉^{エフ}の^ノ云^ハ言^ハなり^ニ准^{クニ}可^カ也^{ナリ}如此^{カク}塩^{シホ}之^ノ盈^{エフ}如此^{カク}
塩^{シホ}之^ノ乾^{ケン}而^{シテ}也^{ナリ}也^{ナリ}上^ウ又^{マタ}也^{ナリ}然^ルる^ルて^テ約^{ヤク}然^ルる^ル文^{モン}な^ナ
り^リ也^{ナリ}盈^{エフ}乾^{ケン}ハ^ハ潮^{ウシホ}也^{ナリ}上^ウの^ノ塩^{シホ}也^{ナリ}同^{ドウ}物^{モノ}な^ナる^ルも^モ也^{ナリ}
毛^{モウ}塩^{シホ}也^{ナリ}潮^{ウシホ}の^ノ成^{セイ}なる^ル物^{モノ}も^モ名^ナも^モ同^{ドウ}じ^ジけ^ケら^ラ相^{サウ}通^{トウ}つ^ツし

存今既不然唯弟獨見御故其生児必如木華之移落ま
了海神云く乃以授彦火く出見尊因教之白以鉤與汝
兄時則可詛言貧窮之本飢饉之始困苦之根而後與之
神功卷2向天而咒詛雄畧卷2指井而詛曰此水者百
姓唯得飲焉王者獨不能飲矣武烈卷2真鳥大臣恨事
不濟知身難免計窮望絶廣指塩詛遂被殺戮詛時唯忘
角鹿海塩不以為詛由是角鹿之塩為天皇所食餘海之
塩為天皇所忌なぞ見むらり。此類ふ古より其術ありし
なる傳し。言の義へ説請う。但し吉かぬや請事又云る
已能呂布や同じさるるて伊勢物語よあまの逆手を
拍てなむのろひをるあるなぞあまの詛あり又麻士

那布ハ吉凶に通ほし云りさるる麻士ハ凶よのみ
云り老まじあの善事よも云ハ後の轉りやあまの
はて詛字ハ請神加殃謂之詛ま。○烟上ハ烟ハ師の加
と謂祝之使沮敗也なぞ注せり。○烟上ハ烟ハ師の加
麻度や訓さるるよ依傳し民戸を幾烟なぞ云も竈處
を以て云なり。今世言も民戸を加上ハ直り其土
は非交竈の上此方の烟の昇る高き處を云ある傳し
これバ烟字ハさるる氣夫。休て此ハ霞壯夫の已か家
理や訓むをあしかり。○置ハ上件の詛物を置なり。○
八年之間やハ干葦病臥せり間八年なるを云上卷2
三年之間必其兄貧窮や海神の申給するや同じ。彼も
間の下よ尔てハ辞を添てハよむ伝か。○干葦
らや彼処よ云ふが如し傳十七の四十二葉。○干葦

病枯ハ干ハ加和伎也訓法シ假字字鏡又見ゆカ此流
也加和久也ハ同じくやながる人身なやハ此也ハ
云信かゞざらばなり上の塩もハ乾や書るも此ハ字
ゆるも示ししとをかきて干や書るも讀の異な
ゆるも示ししと此ハ身軀の潤澤の去るるを云
ゆふてかの塩乾る如くや詛ひける驗ありかく
て潤澤亡ぬるハ身軀の萎むるや木草此花葉も同じ
是かの竹葉の萎むる如くや詛ひける驗あり枯字ハ
若くハ臥を誤るるハ非る此ハかの石此沈むる
如く沈臥せや云ゆ驗ありハ必臥やあるはきものな
了故許夜志伎也訓法上卷もも病臥在やあり若くハ
病也云

るこれ臥や詛ひける驗もて枯ハ干萎病を總て云る
言加やも思やゆへハ干萎や同じとされ言重なり
て沈臥せや云る驗ハ足ぬるらに若枯の方を助
病臥や云てこそ其驗ハ慥に聞ゆ也若枯の方を助
けて云つ干萎の縁と添て云りやせし○患泣
ハ倭建命段もかく見ゆ上卷小泣患やもあり○請
其御祖者これまは実母の如くも聞ゆれやな
か継母なるはし○詛戸ハ戸やハ其物を指て云りや
聞ゆ師ハ戸ハ處なり其戸を詛ひやゆ故に斗やよ
非烟上置する物なり土卷須佐之男命小負千位
置戸やある戸や同じ彼也考合はなし傳九の○令
返ハ母の霞壯夫をして返さるるまで返はやハ烟

二侯王娶其母弟百師木伊呂

辨亦名弟日賣真若比賣命生

子大郎子亦名意富富杼王次

忍坂之大中津比賣命次田井

之中比賣次田宮之中比賣次

藤原之琴節郎女次取上賣王

次沙禰王七故意富富杼王者

三國君波多君息長君坂田酒

人君山道君筑紫之米多君布

之祖也又根鳥王娶庶妹三腹

郎女生子中日子王次伊和嶋

王^{ミコ} ^{フタ}又^ニ堅石王之子者^{ミコ} 久奴王^ハ

也^{ナリ}

若野毛^{ワカヌケ}二^{フタ}侯^{ミコ}王^{ミコ}野^ノ字^ノ上^ノ又^ニ沼^ノ字^ノ河^ノ字^ノ也^{ナリ}。右^ミハ野^ノ字^ノ也^{ナリ}。凡^ソてぬ^ル也^{ナリ}云^フ。○母^ハ弟^ハ御母息長真若中^{ミハコ}比賣^{ヒメ}の弟^ニなり。伊邪河^{イサカ}宮^{ミヤ}段^ノも如此^{コト}云^フる例^{アリ}あり。傳^ツ世^ニの六十四葉^ハ。漢文^{カンモン}書^シ紀^キな^ニも然^シ。御姨^{ミイハ}と御娶^{ミウメ}坐^マる例^{アリ}。神代^{カムヤマト}葺^{フキ}不合^{フキアヘズ}命^ノの玉依毘賣^{タマヨヒヒメ}命^ノよりあり。○百師木^{モシキ}伊呂^{イル}辨^ハ亦^モ名^ナ弟^ニ日賣^{ヒメ}真^マ若^ニ比賣^{ヒメ}命^ノハ日代^{ヒトヨリ}宮^{ミヤ}段^ノ又^ニ出^デり。倭建^{ヤマト}命^ノの御曾孫^{ミソソノ}な^リ。但^レ彼^レ延^コ

み^ハし^テ弟^ニ比賣^{ヒメ}の^ノみ^ヲ出^スる^ノ名^ナ義^イ百師木^{モシキ}百石城^{ヒヤクイシノ}の^ノ意^イなり。伊呂^{イル}辨^ハの^ノ知^ラる^ノ伊呂^{イル}辨^ハ云^フる字^ノの^ノ繼^ツ云^フ例^{アリ}ハ書^シ紀^キ崇^ス神^ノ卷^ノ又^ニ八坂^{ヤサカ}振^{フル}天^{アメ}某^ミ邊^ヘ某^ミ書^キる^ノ字^ノの^ノ繼^ツ躰^シ卷^ノ又^ニ色^{イロ}部^ベな^リ。皆^{ソレ}女^メの^ノ名^ナあり。伊呂^{イル}ハ伊呂^{イル}泥^ネ伊呂^{イル}杼^シふ^ノの^ノ伊呂^{イル}なり。上^ノ又^ニ辨^ハ某^ミノ^ノ辨^ハ云^フ女^メ名^ナ多^クか^ルる^ノ其^レ辨^ハ同^シ。三^ノの^ノ三^ノ葉^ハ又^ニ云^フり。真^マ若^ニハ男^オ女^メの^ノ名^ナ又^ニ例^{アリ}多^クし^テ異^ナなる^ノこ^ト也^{ナリ}。此^レ品^シ陀^タ天^{アメ}皇^ノの^ノ妃^{ヒメ}又^ニ迦^カ具^ク漏^ロ比^ヒ賣^{ヒメ}云^フあ^リて上^ノ又^ニ出^スる^ノハ此^レ弟^ニ比賣^{ヒメ}の^ノ亦^モ名^ナよ^リて此^レ若^ニ野^ノ毛^ノ二^{フタ}侯^{ミコ}王^ノの^ノ妃^{ヒメ}ありしが紛^{ニギ}る^ノな^リ。其^レ由^リハ彼^レ延^コ又^ニ云^フる^ノが如^シ。傳^ツ世^ニの^ノ十五^ノ葉^ハ又^ニ書^シ紀^キ釋^シ又^ニ引^クる^ノ上^ノ宮^ノ

○古事記傳三十四

○五十一

記のハ二侯王の御母の名弟比賣麻和加也。此等
の事も次云伝し。○大郎子名義オホイラツコこやのるこやを
し。郎子イラツコてふ称上も何れ。継躰天皇の御子も同御名あ
る。○意富オホホくド杼王名義オホイラツコ継躰天皇の大御名表本杼命也
申は相照して思ふ。意富オホホハ大表ヲハ小もて富杼ホドハ
同じか。彼大御名を書紀も男大迹也書まじ。男
借然もホド富杼ホドハ意富オホホ杼ドの意を省けるもて。意富オホホハ大
を意を省きて富ホ也云例多し。此ハ殊も上。彼大御名ハ
の大もも小もも意の韻あれオホホハ更なり。大御名ハ
小大杼オホド此王の御名ハ大杼オホドあも。大杼オホドの義ハ未
思得也。特統紀も土師連富ホ地名もやあむ。和名抄も
近江国高

鳴郡大處郷神名式同郡大處神社もあ。此大處ホ
ホド也訓て此地名。彼高嶋郡の所り也。由縁ある
こや次々云が如し。御曾祖父比御名大處なる故
も彼天皇ハ小大處也申せしなる。但記中の例處
の意の斗の濁音ハ度字を用ひし。杼字なるハ
もや疑ひし。さて此富杼を陰也心得るハ非なり。陰の
やもを登字をのみ書て濁音。上官記も一云凡牟都和
の杼を用ひし。るこや也。上宮記も一云凡牟都和
希王娶經テ侯那加都カ比古女子名弟比賣麻和加生児若
野毛二侯王娶母オホホ恩已麻和加中比賣生児大郎子一名
意富オホホく等王妹踐坂大中比弥王弟田宮中比弥弟布遲
波良已等布斯郎女四人也也。凡牟都和希王ハ品
め經侯ハ此記も依ハ。唯侯書紀も依ハ。別も此天皇な
写誤なる。此記も母恩已ハ母の下。弟字脱し。るこや
ハ恩已ハ息長の誤なる。踐坂。○忍坂之大中津比

皇なり。藤原夫人ハ鎌足大臣の御女ありて。万葉ハ二字、
曰大原。大刀自也。あり。大原其本郷なり。天皇初此夫人
の家ニ通ひ住賜りし。故ニ古ニ郷也。ハよみ給子
のなる。修し。十卷の哥も。大原此古小し。里也。あり。
鎌足大臣の本居此大原。藤原なる。故ニ藤原也。云。姓ハ賜り
る。なり。さ。れ。ハ。大原。即。藤原。なる。こ。也。彼。此。又。終。きて。著
し。かくて。持統。天皇。の。京。北。藤原。宮。ハ。異。地。なり。思。混。ふ
は。り。云。地。な。れ。を。畧。き。て。藤原。也。云。し。なる。修。し。
其。地。ハ。香具。山。の。西。方。耳。成。山。の。南。方。なり。書。紀。持。統。卷
釋。又。遷。居。藤原。宮。私。記。曰。師。說。此。地。未。詳。愚。按。氏。族。畧。記
云。藤原。宮。在。高市。郡。鷺。栖。坂。北。地。也。云。香具。山。ハ。十市
郡。な。れ。也。此。宮。ハ。其。西。方。高市。郡。の。地。也。そ。あ。り。け
む。鷺。栖。坂。の。事。ハ。王。垣。宮。段。鷺。巢。池。の。傳。を。考。合。せ。て。知
は。し。然。る。又。彼。大原。也。此。宮。也。を。一。心。得。る。ハ。地。理
を。も。考。考。さ。る。妄。說。なり。大原。ハ。香具。山。よ。り。ハ。南。方。也
ゆ。ゆ。り。て。飛鳥。又。近。き。処。ふ。ま。る。か。の。万葉。の。長。哥。の。趣
又。合。ハ。交。さ。て。書。紀。推。古。卷。又。藤原。池。也。ある。ハ。藤原。宮
の。藤原。なる。修。し。聞。ゆ。又。今。添。上。郡。琴。節。の。意。ハ。未。思。得
も。藤原。村。あり。れ。也。其。也。又。別。なり。琴。節。の。意。ハ。未。思。得

交。な。り。次。云。修。し。琴。節。の。字。ハ。借。字。なり。書。紀。頭。さ。て
宗。卷。又。節。歌。曰。云。云。也。あり。れ。也。此。又。由。あり。し。さ。て
上。又。出。し。る。天。皇。應。神。の。如。具。漏。比。賣。の。腹。北。御。子。五。柱。の
中。小。登。富。志。郎。女。也。云。ある。ハ。此。郎。女。の。紛。れ。終。る。なる
修。し。此。ま。る。け。の。事。既。又。傳。此。ニ。云。又。歌。又。名。高。き
衣。通。姫。也。此。郎。女。の。こ。也。なり。其。故。ハ。彼。衣。通。姫。書。紀。允
恭。卷。又。皇。后。忍。坂。大。中。姫。の。弟。也。あり。て。名。弟。姫。容。姿。絶
妙。無。比。其。艷。色。徹。衣。而。晃。之。是。以。時。人。号。曰。衣。通。郎。姫。也
也。ある。衣。通。也。琴。節。也。言。甚。近。り。ハ。なり。衣。通。ハ。曾。登
富。志。也。訓。修。し。曾。也。許。也。音。横。又。通。ハ。富。也。布。也。殊。也
通。也。全。く。同。じ。然。る。を。書。紀。又。ソ。ト。ホ。リ。也。訓。古。今。集。序
な。り。も。然。ある。ハ。舊。く。よ。り。訓。を。誤。さ。る。を。の。なり。書

之後也。阿居乃王ハ意富ク續紀廿六又息長連緒繼賜
姓真人連ノ尸ハなれり也。姓氏録右京別息長連應神天
皇皇子稚淳毛二侯王之後也。○坂田酒人君ハ酒人ハ
登ヤ訓シ書紀崇神卷二掌酒此云依カ今ハ書紀ハ紀ハハカの假字ありさカ此をサカドサ
カドナダ訓ハ後ハ音便今の諸本字脱テ決難
又類ノ下ナダナ訓ハ後ハ音便今の諸本字脱テ決難
さ由あり二ニ釋シ其一ハ諸本坂の下ハ君字あ
ふハ君坂なる字下上又誤るもて。此君字ハ上の坂
の下又田字を脱セるあり。又ハ上又君字を脱シ田字
も同じコ故今改補テ坂田ハ和名抄又近江國
坂田佐加郡これなり。書紀允恭卷二衣通郎姫出上

琴節即女なるこの母又隨ヒて近江坂田在しよ
既又云ふか如しの母又隨ヒて近江坂田在しよ
し見むるありされハ其御兄弟ふれハ意富ク杼王ハ其
延又坐シけ多加シ。継躰天皇の御父彦主人王の別業高
の息長ハ同國同郡あり。されハ此御酒人ハ地名なり
族ハ右又近江國由縁ありなり。酒人ハ地名なり
和名抄攝津國東生郡酒人郷あり此ハ河國碧海郡
酒人ハ氏ハ姓氏録又皇別坂田酒人真人息長真人
神社あり。書紀又此ハ姓の見えざ今ハ諸本又坂の
同祖ハ何なり。由ハ次又云シ。今ハ諸本又坂の
上下又君字田字比脱るもて坂田君又酒人君又二
姓あり加クて地ハ二共又右ハ云る也同じ氏ハ坂田
君ハ書紀天武卷二坂田公雷云人見近同卷十三年

天皇の御子菟皇子を是酒人公之先也カサキ也。所ハ三國、
君坂田君也。同例して傳の異なるあり。此事カサキなるは、姓氏
録も、大和国酒人、真人、繼躰天皇、皇子兔王、之後也。ま
未定、酒人、小川、真人、繼躰天皇、皇子菟王、之後也。な
見む。右の二、坂田酒人、君也。二姓、酒人、君也。云、の内、何
方な。書紀天武卷、真人、姓を賜する中、坂田公
酒人、公ハありて、坂田酒人、公也。云ハ無きを以て見
也。後の方、二姓也。なるは、然も又姓氏録、坂
田酒人、真人もありて、息長、真人、同祖也。ありを、必も
二姓の方也。決サダるが、サダなるは、依て若、坂田酒人、君な

ら多しハ、書紀姓氏録、坂田、真人、酒人、真人也。の差別ハ、
如何イカニ云ハ、坂田酒人、君も本ハ坂田、君よ、支別ワカる
依姓もて、天武天皇の御世、又共、真人、又なるを、真
人、録もて、知らる。別、記されざるハ、本宗の坂田、君
よ、ヒトノウケるものなり。依る例あり。物部、朴、井、連、也。云、姓
朝臣、よ、ありたるも、物部、よ、ヒトノウケて、別、ハ、其、書紀、
さ、ヒトノウケる類なり。此、ヒトノウケ傳十九の六十六葉、云、ヒトノウケて、
酒人、君也。云ハ、ヒトノウケる異姓あり。見、ヒトノウケる如
く、繼躰天皇の御末、なるは、ヒトノウケ。但、此、記の、此、ヒトノウケ坂田、
酒人、也。二姓、ヒトノウケる也。繼躰天皇の御末、ヒトノウケる也。異
なる傳、其、別、ヒトノウケる也。此、ヒトノウケる本宗の坂田、ヒトノウケて、
坂田酒人、君也。ハ、云、ヒトノウケるは、ヒトノウケて、ヒトノウケる也。

くせまハ混ミカひ故コ傳デンし。此コ又マタ此コ其モト本宗トする坂田君
茂モおきて支別ワカレの姓ナリを奉ホウむハ。い加カるや云クふ。その其時
代トキおよめて本宗モトノウヂハ衰シて支別ワカレの榮ハルえくむなやハ
其コノ榮ハルてくる方を奉ホウするもある法ハし。三代実録七
田タ郡ノ元ノ太タ氏シ譜フ因ニ與リ息長坂田酒人兩人同ニ卷進シ官ニ也ナリ。
酒人ハ心得コト交カ兩ニ氏シの誤アなる法ハし。然シカら息長坂
田タ酒人ノ也ナリ。○山道君ハ何ナニ國ノの地名ナリおよめるなむ未
考コト得ズ也ナリ。今イマ畿内近江ふや此コノ地ノ名ナリハのこりし法ハや尋
也ナリ。次ツギなる筑紫之米多君ノ縁キあはれ凡ソレて真人ノ尸シを
賜タマする姓ナリハさる遠國ノあるハをさく見えざるなり。
書紀天武卷ノ二十三年冬十月山道公等十三氏賜タマ姓ナリ曰ク
真人ト今イマ本ノ此ノ姓ヲを脱ツぎ少シ十三氏ノ也ナリ。又マタ此ノ氏ノあり。姓ノ氏ノ録

左京サキヤウ又マタ山道真人息長真人同祖稚渟毛二俣王ノ之後也
皇別ミコトワカレ右京山道真人息長真人同祖應神皇子稚渟毛二
俣王ノ之後也。○筑紫之米多君ハ米字諸本モトノ未ミ或シハ未
也ナリ。作カるハ並ニ誤アあり。記中ノ未ミ未ミを假字ナリ。今イマハ真福寺本
小依コヨり。和名抄ニ肥前國三根郡米多メタ郷ノ水ノあり。
國造本紀ニ竺志米多國造志賀高元穗朝御世息長公
同祖稚沼毛二俣命孫都紀女加定賜國造ト。此ノ米字モ延
朝ノ誤アるハ。舊印本ニ米多メタあり。そよき。法ハ志賀高元穗
續紀三小米多君北助ノ云人見ミえ。○布勢君ハ何
國ノなり。未考得也。越中ノ國射水郡因幡國高草郡隱岐
國海部郡播磨國揖保郡美作國大

庭郡なげふ。布勢郷あり。又神名式に布勢神社を
加し。この地縁あり。其中小近江国伊香郡に布勢立石神社
あり。此地縁あり。但し上の筑紫之氏も慥に人物と見
ゆる。此姓も係ゆ。詳なき。氏も慥に人物と見
ゆる。布勢臣布勢朝臣。姓氏録に布勢公仲哀天皇皇子
忍稚命之後也。ある。此氏もて傳の異あるもや。又
續紀十八に布勢真虫賜君姓あるも此氏に。○継躰
天皇ハ此意富く杼王の御曾孫に坐を彼天皇御段に
めぐ品陀天皇五世之孫の系記して其御世系を記
す。依然まは伊邪河宮段に息長帶比賣命神功の御世
系を記せる如く。此に必繼躰天皇の御祖世系を記
次修きこせなるも。御後の氏くをのみ奉て其を

記さぐるハ事柄より故今書紀釋に引る上宮記に依
て試み云ハ故意富く杼王娶中斯和命生子宇比王此
王娶牟宜都國造名伊自牟良君女久留比賣命生子宇
志王此王娶伊玖米天皇七世之孫振比賣命生子袁本
杼命也。記次修きこせなるも。は彼此御世系の香き事
○根鳥王ハ此天皇應神の御子にて上に出よ。○庶妹
ハ麻く伊毛也。訓るきこせ上云ふが如し。○三腹郎
女も上に出。○中日子王名意こせなるも。○伊
和嶋王名義地名なる。修し。大神官例文に五百野皇女
の次之齋王に伊和志真王
妹云ありて仲哀天皇の御女也。其ハ中日子王の
妹云を誤て足中日子命の御女也。此王に

古事記傳三十四
 六十二
 名の御子ハ無けり。○註二王真福寺本又一本
 名ハ三柱也。河也。○堅石王ハ如多志波也。訓治書紀
 雄畧卷日鷹吉士堅磐固安錢也云人名ありて堅磐
 此云柯陀之波也。見ゆ和名抄云筑前國穗波郡堅磐
 之郷あり。萬字ハカを万誤り。此地名又依る
 名あり。此王ハ見む。更ハ書紀も無し。名
 名をかくゆり。ななく。奉。法。由。な。し。傳。の。乱。り。は。こ
 後。よ。上。天。の。脱。り。如。多。遲。王。也。云。ハ。上。又。見。え。こ
 少。若。其。也。や。同。此。記。の。中。に。○久奴王。ハ。毛
 前。後。也。異。な。る。法。也。非。る。と。や。○久奴王。ハ。毛
 地名。も。や。ハ。始。意。富。々。林。王。中。國。味。命。也。ヤ。中。國。王。也。
 あり。む。ハ。車。國。と。も。始。今。書。出。上。代。の。王。宮。蹟。也。

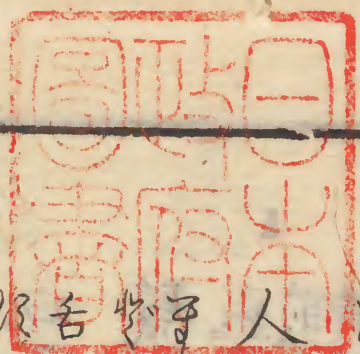
スベテコノホムダノスメラミコト。ミトシモ、チ、リ、ミ、ソ
 凡此品陀天皇御年壹佰參拾
 也。アリ
 歲御陵在川内惠賀之裳伏岡

凡此云くかく云る例白檮原宮段の終あり。傳○壹
 佰參拾歲書紀云四十二年春二月甲午朔戊申天皇崩
 于明宮時年一百一十歲。一云崩于也。あり。仲哀天皇の
 生也。あり。小依也。バ四十二年庚午八百十一歲。又あり。こ
 也。バ一年違り。或書云百十一歲也。云るハ此年數也。

山・藻・伏

合せて云るなる信し大隅宮ハ。○舊印本真福寺本又
難波よあり廿二年の此又見也。○傳廿三の委
一本なやろハ。此間ハ甲午年九月九日崩也云八字の
細注あり此例の細注此事水垣宮段末
云るが如し甲午年ハ書紀よてハ此天皇の五年一十
よめ廿六又仁徳天皇此廿二年
年前なり。又仁徳天皇此廿二年
此御世の四十年一十
よめ廿四年後あり。又
此七一の古き傳
なる信し。○川内惠賀ハ上又出傳一の
此名ハ母布志ク母布須ク詳カクねや姑く穂なる
有藻臥束鮒也。訓也。田中道麻呂云万葉四の哥よ吾漁
心得るる多小若ハ誰もく藻よかく産るよし
ハあり。諸陵式小惠我藻伏山岡陵輕嶋明宮御宇應神

天皇在河内國志紀郡北城東西五町南北五町陵戸二
烟守戸三烟也。山岡也。岡を二字と誤る
書河内志又在古市郡譽田村式属志紀郡陵畔有冢七
曰馬冢曰鞍冢曰圓冢曰登久理冢曰久豆冢陵東有馬
鬣封俗傳武内宿祢墓云。前皇廟陵記よ譽田ハ幡宮
山藻伏山岡陵是也欽明天皇二十年二月十五日勅陵
前立社譽田ハ幡宮是也今按云蓋古市郡志紀郡相
隣陵接二郡界故為在志紀郡為在古市郡而已。去三
桑畧記曰治曆二年四月廿五日石清水官司言上去三
辰廿八日戌刻河内國譽田天皇山陵震動放光之異也
ハ信が社今も御陵此前後の事なる書紀よ此御陵を
記され例と違り後不脱せるもや。此雄畧卷よ



九年云々蓬菓丘菅田陵蓬菓此云伊致寐姑姓氏録上毛野朝臣條又菓岡也毛云しよやいふ加同故事を挙ふるは應神天皇陵也辺也ありて地名を見ゆ交 ○舊印本又一本なり裳伏の下岡此上よ百舌鳥陵也云五字の細註あるは決後人の書加可りたるはためりなり百舌鳥は地ハ和子或説又毛受より裳伏山改葬せるなり云是ハ裳伏を即百舌鳥也注ふれ論なき也以てみきりあし可なり云契仲が河社云百舌鳥也云延今世ハ代也書て和泉国大鳥郡又あり代の八幡也て陵也似し月よハ元日より三日間肉を食ふなり加く断て急る遠國又行て住けり也仁徳履中又正三代の山陵の外也

あめ也云り百舌鳥也云地の事ハ仁徳天皇御陵の下云信し今ハ真福寺本延佳本なり又無き本もあり也

古事記中卷終

終字ハなり本もあり又卷字ハ共よ無き本もあり

